

共和国解体の危機

戒厳令発動

●5月20・21日

学生、市民らは人民解放軍の北京市中心部への進軍を阻止する一方、兵士たちに笑顔を示した。五月二十日、戒厳令発令下の北京、たばこやお茶、新聞などを運んだり、「本意」を伝えたい」と脱走したり。他方、デモ支援者は天安門広場に向かい、市中心部は学生、市民らの「解放区」の様相さえ見せはじめた。北京市上野や、空軍の攻撃ヘリが編隊を組んで威嚇するように旋回したものの、事実上、戒厳令は骨抜きにされた状態。解放軍内の足並みの乱れを指摘する声もあり、強権発動に踏み切った鄧小平・中央軍委主席や李鵬首相らは一段と追いつめられている。



ハシストが持つ中、倒れる三三三増えた

戒厳令下、武器を持って別荘にたてこもる人民解放軍の兵士と逃げ出す学生ら(5月21日)



共和国解体の危機

中嶋 嶺雄

中国は建国四十周年にして、いよいよ共和国解体の危機に瀕している。そう思われるほど、今日の中国情勢は深刻な様相を呈している。今回の学生運動には、注目すべき特徴が三つある。

第一に、従来の民主化運動と違って、今日の中国には未来がない。社会主義はもうダメだ、という絶望感があること。

第二に、運動は全国津々浦々に急速に拡大しており、極めて広い大衆の支持を基礎としていること。

第三の特徴は、皮肉にも、ベレストロイワのゴルバチョフ書記長の訪中によって民主化の動きが鼓舞されたこと。学生たちは取材で訪中した千名を超える世界のジャーナリストを意識して行動したが、経済改革を進めて、それに民主化が伴わないのなら、大衆は決して満足しないことを露骨に示した。

テレビの報道を見ていると、学生たちは、暴力的な行いに出ず、かなり毅然と抗議行動を行っている。この運動が挫折したら、もう中国に未来がないのではないかという絶望感が、慎重な行動を促しているといえるようか。

それだけに、こうした学生たちが強権を発動して抑圧する必要があったのかどうか、大いに疑問だ。しかし、強権発動には次のような深刻な理由があったといわなければならぬ。

民主化要求は、鄧小平氏および李



夜を徹して天安門広場に集まる学生ら。笑顔を見せる人も

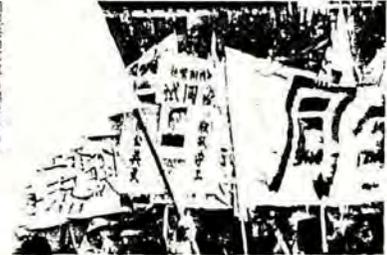


20日早朝、北京市中心部への進軍を学生らに阻止された人民解放軍のトラック



式場を超す中、集まった大群衆。ジュースがよく売れた。

百万人集会
 5月17日、18日、19日
 天安門広場を埋めつくし、周辺の道路も歩行者で閉鎖された。群衆は、口々に「小平出ていけ」「李昌やめろ」と叫び、旗を振り回した。五月十七日、百万人集会に臨んだのが、大衆には、一般市民、労働者の参加も目立っていた。職場を離れた学生、工場長の制止を無視して参加した職工、主婦の女性連帯も目立っていた。五月十八日、李首相は学生代表と会い、八二文中止の最後通牒を試みるが失敗。翌日以来、北京に初めの通牒を布告するという意思の手段を講じていると見なされた。



天安門の五毛も掛けられる



あつたはりの学生が



天安門の五毛も掛けられる



天安門の五毛も掛けられる

鄧小平の退陣に殺られており、そうした中で、共産党の一党独裁、鄧小平氏のワンマン体制への不信感が、政府や党、人民解放軍の内部に広がり、それはゴルバチョフ書記長が北京を去った時点を学生たちに呼応する動きとしてゴツゴツと進展していた。鄧小平氏は、李鄭首相とともに、フィリピンのマロスサオ大校のような形で、大衆に控訴されて、退られるかどうかの瀬戸際に立っていたのだ。

一方、党中央の内訌でも、深刻な亀裂が広がり、学生に連帯する姿勢を見せていた趙紫陽氏が辞任に至った。趙氏が復活するとしら、反体制側が勝利した場合に、学生や大衆は趙氏を全面的に支援しているだろうか。学生たちのアイドル胡耀邦氏失脚のときに、鄧小平氏とも



革命の犠牲者をたたえる『人民英雄』の追悼、参加する学生、市民ら

もに胡氏とならぶと分かんない。趙氏が総書記に就任した経緯を考えると、趙氏は必ずしも学生の救いの星ではない。そこに事態の深刻さがあるといえる。

つまり、これまのような政治を共産党がやっている限り、中国の知識人、学生、大衆は満足しない、と見ざるを得ない。現状は単なる政治危機でなく、体制の危機、つまり共和国解体の危機だ、というのはどうした意味からなのだろうか。

当面は、力による事態の收拾をはかるだろうが、そのことによつて問題はますます深刻かつ広範囲に拡大してゆく可能性が非常に大きく、今後の中国の行方は予断を許さない。

日本政府は、日中友好の建前から中国の事態をきわめて注視して、日中経済交流のためには、中国への投資を奨励してきたが、このような状況で、日中経済関係が維持できるのだろうか。



毛沢東の追悼も……

中国の事態はきわめて深刻なのであり、日本人は、しもし其の日中友好を願うのなら、学生たちの動きへの共感を抜きにして問題を語ることはできないはずである。それは今日の動きは、歴史の新しいページを切り開こうとする大きなうねりだと考えねばならないだろう。建國四十周年のいま、もう一つの革命が中国に起こりつつあると見做さざるを得ない。

(東京外語大教授・現代中国学)